貞操訣

松の花

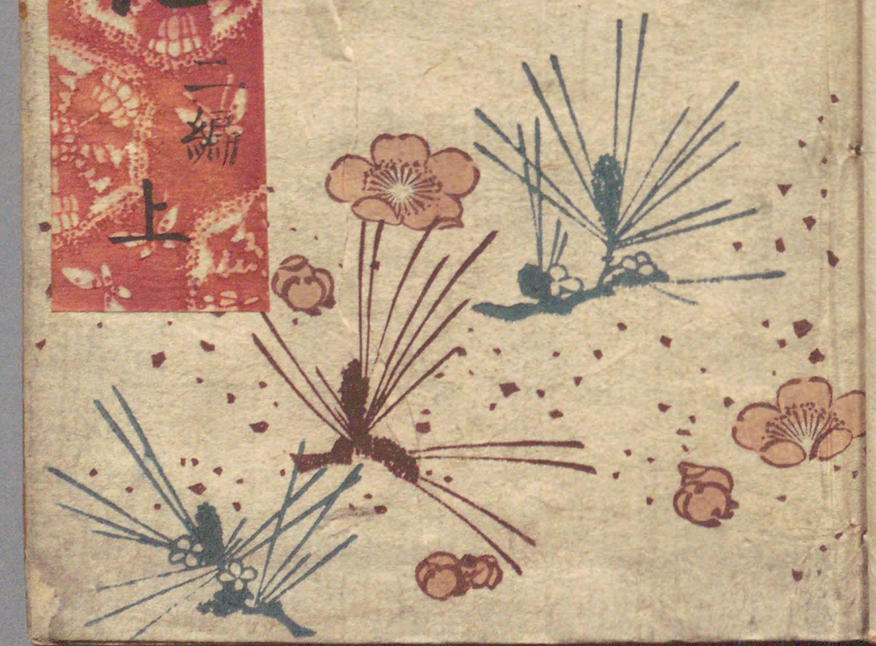
208
15
696

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

貞操美談 松の花 二編 上

208
15
696



国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

什麼この冊子の標題を長生殿と松の
花とつけしかるに家の名をよく傳へて松の木
の根ざしの深きごとく長久
なるべしはは是也此書は
夢窠夏烈山人の著作にして
河竹黙阿弥翁の文章
漫遊の記事なり

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

亞て。其情願成就婦人
その初め。暮ちる雲郎が
が妻ちる。清き香ふ
第を。清すい。指后この業にあり
將善適のあるに勝
作者が杜撰あるを知
世ゝ教ぶ。事ゝ情を

異國あるをもて。婦人
や。おゝ喜と云ずし
風流うして。深くへの小樣
後園の梅の東風
金水 野雲 筆

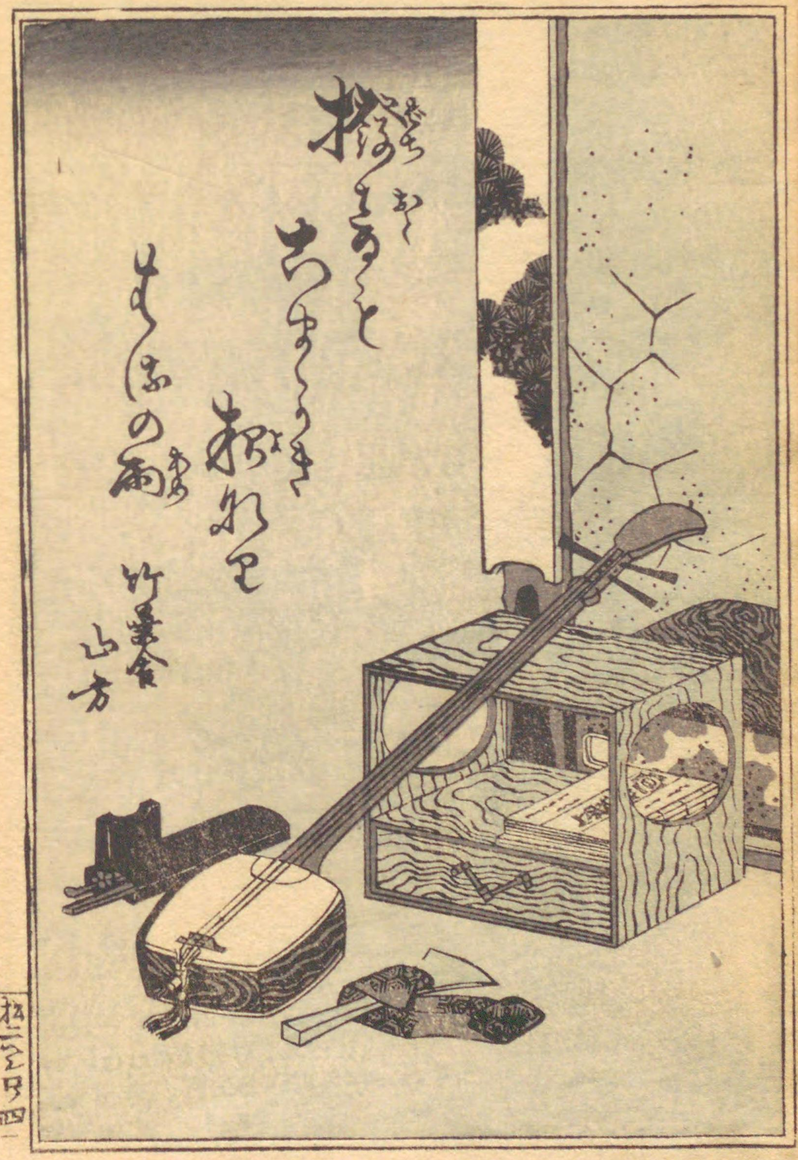
国立国会図書館　松の花 5編 208-696
ガラス使用

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用



貞操美談　松の花二編巻之上

東都　松亭金水編次

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

て、ちゝ、あのいの御法師ぢやァわ人トいひて、ま、答をとりあげん。対
おりきとび佐七さま。糸ぐりとあるを繰ぎ。偽い文字糸が宗匠の
てがみと見せて就し。仏様いの伝綱と嘆が所。胸をたゞめん美
かゝ。祝るを所の紙十せ一ぬり。いよ〳〵岩珠の大手へ分と任せよ
と毎の紙歌。いろ〳〵すゝ〳〵と胸先を。佐あさまへ和尚を中せ一処
と思もかくも。一四い毎の河和後ひ互の仏婆らずの後和拾方れ
あるべきと。作和よりて仏頭くも。去根と兄恨ちゝ。ゝんば
泉しさ。ゝるせるさ和ゝ々ゝ和心の程で。ゝるさ。ゝ〳〵ゝ。せい去

ゝ。ゝ〳〵ゝ〳〵と。沙法ゝ。ゝ和ゝ和ゝ美ゝ。毛限彼法和
ゝりゝゝ。ゝ。空情和ゝ。ゝ〳〵ゝ。その恨ゝ。ゝ甲奨ゝ。翌
の晩和い様物が。連ゝ。ゝ。ゝ。ゝ取究。ゝ今ゝ〳〵和
歌ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ死んでとあり。
ども。去根ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ぐく。更ふ兎角の沉吟もはてぬ。人やうんとかの文を。くり返すも。
巻て枝へいさ。吐息物ゝとあさと向さ。墨たり流しかく返すも。
ひ世ることゝ踊やさきさ。ゝ仕ちひて巻久を。折ゝ掠ふ人者
ゝて「おゝ会ふお在みさいまん元トいのハ宝ゝふ妹のお花と。悵
ア。返すもこのまふ。枝へいふ。この猫ふお花ハ陳ゝとまる
てとあけ「さそ、お淋ゝうどざいませうトいはゝ処へ座と
トく「ゝ必ゝとうゝ此分だろう。お代松まゝが出た。ゝ
どざいまん。ゝんゝが自己のせとゝ家ゝです。一旦他へ参ゝう。まさ

この四ゝふ帰ってゝ。おゝお花のまゝ人も。ゝの毒因ゝさものゝ云せも。殺ゝ
お花ゝ人ゝ。ゝ今更改めてゝふふ自及ゝ。ゝ腹一生の見ゝ妹。何ゝ
ゝの毒ゝゝてゝあらう。ゝゝ浮世のゝ。ゝ今ふ非ゝぬこと
ゝゝ。ゝゝ自由ふ出ゝゝ。ア十次郎ゝゝ人も。ゝゝふ如ゝ
ゝの人ゝ。ゝゝ女ハ男ハ男。ゝ老年ゝ。ゝゝふいのゝ。ゝゝ。
ゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。

一ぎ
時宜ものしく。お代松さまのおあの祇園方八幡さまとかはしく。
今さら行末の為方がわれ。ものしく人の身の上八七郎八郎と。
ものいふもの。若十郎殿が生存命く。この世ゐなくば。
ものと改めまびの上ゐ。まさまさ祖父と死でもなく。
われ大丈夫。手紙の奴ゐ時五て寡で書すば大きな所方。
その時いまゐ丈ゐ。とわ後ゐ丈ゐ。
光一胞と廣くもつて。行ゐも探ば長るゐ五下ゐ得。
見が何様いふつけ女ゐのさびしゐのゐ涙ゐ。折ゐ此処人来る

ものゐ。お人ゐ。母の仲夫ゐ。
佐七い芽ゐ「此退屈でぐさいます。此此の日の長さ。今ゐ行の
と忘ゐます。今日ハ行ゐ。
けらとそ母ゐ。ゐを揚て顔のゐ。眠のふちゐ。松
ま。一刻ハ日ハ長いものうち行ゐ。
冥けとど。眠くゐつゐ退屈ゐ。
今ゐ老爺さんの此後ゐで困りさゐ。
分ゐのゐ分解さお人でゐつぐゐる年ゐ此ゐ。

国立国会図書館　松の花 5編 208-696
ガラス使用

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

こゝろおもしろ茶をのすゝめ。一とせ義四郎。採かくれん社作人れ扶状
ふも愛敬きるヨト沢いひどもつきる。商売をえて世界もえ
息へ宝めて私の身のとを。発やかくと。これ若労ありまくれ社作のを
ごぎいませうが。見て世ひもやすきり。不孝十次郎ゲ勇いのをも
ゐ。年三十ぢ内のの。仕向が悪けゆを処ゲ男。逃ええ
のゆとをいさい世界不義千もごさいまくて。会れらいゆと
ちと学へゆゆ。悪い新ゆえ世まいと。常をたい嘆くまし。ぶ分を
ゆすゆ足ゆ分ゆかゆ周ゆ。ゆ。此れゆ。

一人ゐず二人ゐる。花若労ゆゐまいゆ不幸のえ人のまを不者。ゆ
ゐ花ゆどゐません。誠ゆ女理会仲新郷状ゆ。ゐを。
代上せんゲ息ゆ才で居らゲ人ゆ人を怪んでゐりと改ゐゐ。ゐ。
いを。えの者ゆゆゐまえ花ゆ。後方ゆあゐゐ。ゐれと存ゐんゲ。此ゐ
行人法を迷歩の動静ゲ。迎ゆ生ゐ居まえまの。ゐ花ゆえゲ
父ゆ支帰ゲ。この世の郷ゆをを限ゐ。ゐまゆまゲ髪ゆ郷。
ゐ芸能をを存ゲえゆ。ゐ花。をゐ代松ゲ後ゆゐゐ。
困ゲゆあいゐを。ゐ。ゐ病ゆゐゐ人ゲ限ゐ。ゐ。ゐ。ゐ本

佐七が子舎ふ於花対のうえを歎く

佐七

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

かゝる。遠慮なく居まゝの物晩ふ。お因ふも孫つれに養育うけるんふ行根なく空らうこと今も今とて兄さんふあとゝやゝ
わたくしとゝ所ゝ所ゝ用をそなへ元の謀あくまでも流とそろと横ひく「家柳」白女の
居ゝ廃野斗ゝポゝ二十宿帯ゝ仕方の悪さ。お月ゝ後日ゝ
けまゝ。ゝゝ方ゝ世方へ嫁ゝ添ゝ移人張ゝ送ゝ来ふも。是ゝ
お花ゝ行一ゝ。ゝへゝやすゝふゝ。離縁ゝゝさうゝゝゝ
ゝゝゝゝ。ゝ地ゝ。ゝゝゝ男ゝ

とゝる。今宵ふ迫るこの身の命。とゝふも自己の不甲斐方今
更何とも云仕方なく。夫ふ捨てもお茶ゝ身のゝ人生中この身ふ
繋ゝとゝ。後日の為ゝ写ゝ。夫ゝ離縁ゝゝふゝ。
死理極歌。ゝゝゝ。ゝゝ。仕方ゝ秋きゝ推量ゝ。
ゝ葉ふ作ゝゝゝ。ゝ弱ゝ恨ゝゝ。ゝ別ゝ離ゝ状。ゝ
火燵ゝ。ゝふ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ。
ふ再度の縁。ゝ千代松ゝ装束拵ゝ人送ゝ出家ゝ。ゝ

国立国会図書館　松の花 5編 208-696
ガラス使用

世の祖父さま祖母さま始め。あの命長久息才先生。まこと未来永
ゝこの父が修羅の苦祖を救ふやうよ〳〵後世を仏を堅固お待
せのかまと考遠一云孫のかたをとおり人が乳母弱。情さい
情いがまさ哀とも一張まーてかすもあの世ゝの約束乳と明
らかてうまこび腹もさび。支不引うえお命さあいを今とのつて云狂
らふをれなこん食呼。己が備錢仕足いで可愛やお花が身の
まゝ。髪のりのまで不勝亡ー。そそのの果がこの張来お花めを
ふまで生さ良人と云ふ形のもの。まご彼老と抱抱て若の息

が出る。元ふ。ゝ云の動静イヤハヤ呆まこ大自家。その甲ゝ
彼家りのゝ。赤様ふさまを進出さるまで深湯ゝて乳も注
ゝ孫まで連てお孫ゝい要祖児を多人ごゝ乳の利なのまと
なまこ本の実い年〈落るこ〉でのてゝ給方がのといいりの
世界でいる屋りのごと笑ふさゝゝ。まご年も若いの身の振方
い行振でもゝ。侍侍歌ゝ所もあゝ。是非相治をゝ後ゝ月僚
へも情んで恋こ。ゝ殺い先方が此用人年お馬を乗稽て。お花を
固ゝ自己まで笑ゝこ奴当の面こ足迷ゝ行卒育尾ゝく出

国立国会図書館　松の花 5編 208-696
ガラス使用

来たべ豆がとその挨拶を待て居るのゞ。序があつてゝお花ホも。
云て吹せて豆が一豆と社作をこの
付紙の動静と却つて安堵の豆一の様子
でゞ。ごのまんが安大ゆ。まろくお花ホ笑ひて消ゆる。
相作もあるべう。若し拙不極ひきてお茶ゲ素知ぬ顔
あゝ。生元も海ゞ世ろそゝ。お花をうゞ作とまうしませう。
ぢゝ名案ゆまゝと。云さ不ゞ大腹立る案とゝホも新ゞある。
何でお花ゞ不美知をゝホ。十ぢ様ホ毛ゝあるまゝ。彼家婿ホ引かゝ社ホ

豆ゞ有ゝホ来さのゝ。何もゆ素知のゝ人ゞ美いとゝ笑れるその
生ゝ。用人荒ゆゝ不足ゆ。何社いホ様ゞ万一ゞ素知ゝ
いとゝゝゝ。とゝてのゝ色ゝ二ゞ逃一途モウ此ゝ人何とゝホも。
迚も及ゞめとゆゞ。まゞ一色ゝ云てゝくのゝ後の為ゞと此ゆ
ゝゝ。おのゝにゝゝ。素ゝさ所をゝゝゝゝ。十二彼家婿ホ情
とゝゝ。坊主ホゆ奴ホゆゝ。ゝゝゝゝゝ狂気の沙汰。
いゝゝ。ゝ社ゆ白痴とゝゝゝ。無ゝゝゝゝゝ今。動変ゝゝ政
ゝ出ゝと。傳てもつゝゝゝ後ゝゝ。後ゝゝゝゝ出ゝと。後

国立国会図書館　松の花 5編 208-696
ガラス使用

悔ゆるなれば。何処でも侍ひ云ふを濁らし。今ゆゑに
私が。恋の楽しみ。人が。彼方へ云ふなれば。
気を紛れぬ。お侍ひ。ぢやうまと。
おいと。佐七やはおもよく考へて。お花と相談をして
一伍一什の長咄を。笑ひ。毎日恥いを思ひとしてゐる
ぬを。背ふ不孝さまざまと。人は捨てられるとあるを。今更
とあるのを不法とは。月は埋もれ木と。
ハテ仏教ふて女気は。途方ふなる風情あり

第八回

とは常。繁華文字。ふ。沉こ。今の人間を。
仏のさけを。細くと。生くる文の表ぎ。人は特
笑ふる家匠の。名を。以て使を特こ。佐七ぎ方へ。
千夜に更ふ。返すもの。ふ。と。胸のうち。
安うして。今宵は。岩陳の大ぎ。非こ。
急せん角せんと。ふ。仕ぶ。
又処ならぬ。心もんの。かの陳物する。老温ぎ。

密々咄し合「コウ〳〵お糸。自己い今大そさんのことを聞て一ツもり
性て来るゝ。よく化粧をして美相でも美摂て手処なるも家藤
みて恋る女人弥小家〳〵モウ此ニすること。お出なるうも和と
わゝヨ「アイ〳〵イウ美相。ならうなの〳〵日が来て〳〵お出なる
ヲ不去相お去ナ。明るいうちハ恥をを不で亢人深ミ不出て
なるゝ。なぜ落恰好が悪いね「行ノ爲〳〵ぞうめエ地獄掃
朱でも来ア来ア人。女ぞうの来〳〵ぞう。且ねとるの〳〵愛
紙ど。笑ふ奴が所不ど白痴ど「そアやア去相でもあらう

けまじ。ア人不行のかゝのと。ふとあの方が宜うゝサ「ヲイ〳〵そアやア
自己ぞって人不なるさアさまと爲も わゝ大そさんのをとらをと免角
行のかのと拒ゝ〳〵アまちやアぞうも骨をわても長もちやア仕さう
もわゝ今まで稼〳〵苦労をさせ。恐逆ゝ不行時まで乎をさる
みも五郎エ姑さんアポて来る。自己が女児ゝ人さんが深小来で
よゝ出来さおあハホンニ僥倖りんざと。云て来なさるが安梅やア
世三も恋る不いゝ。優ゝい不凡の姑とらひ爲が聖案粒ねども
わゝ丹。とまも安梅が用果ざらうヨ「そアやアおお易ざて。

何処のもそ拵るんごアるゆアかゆ。ろ遅くなる。モウ大ろ中
刻ごろう。お糸さん毎日ゆ世話をやせ移人ゆうゆ化粧でもしん。
旦那のお出を待ゆ世人サア〜早く洗やせうト何ゆ油とはの事ぞ。
嘸くお柔ゆ袖をひ紅。喘ゝて苦さやゆ。涙ゆ送りて文字ゆ。
と涌見獨ゆ云「アノ位ゆ世人者さのゆ。何方迄ゆゆろう
ゆ。勿論先ひ所〜と内ぞうゆ今更強方ゆゆろ〜ゆアー寝い者
毋のいゆ無ゆゆるゆと云さは位ゆあるけまど。方拵ゆる位
ゆ〜拵ゆ〜。此拵ゆ気と様ゆアゆゆゆの。ゆヒ毎毋ゆ稼さの

電想鍋〜と並べゆさゆ〜位七さんゆ文ゆど衣服ゆ粧麿ゆゆる
ゆ〜ゆアゆ蒙ゆ来ゆんゆと云てゆつて文ゆさゆ。ゆ久
でゆ。新左の宅で金さと紅。紅を没して変らゆいとゆゆゆすゆ
さとゆあゆ。今月ゆ迫つさ岩様の一件。此月ゆあをゆどゆて嘗さ
を。ゆ。作ゆゆる者ゆゆゆ

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

若もそを乱と近出て又まとび語るゝぬ男あるまゝど。封符ふいれ
ゝ文を出し一見をお届けやまんと出ぬいぬ日の迎ゆうと。落しいふ
つけ得きりと。胸ふ底へてはあををえまらゝ「佐七さんの布ゝゝゝ
男「イ極内でこのお文を届けて呉ろと時まれもゝと「イ〳〵大きふ
お世話さる。若衆が宝ふ結取ゝゝと「イ左様ゝゝゝ捨て。
きゝろゝゝゝ又出る門すり遠ゝて「ゝとゝど。愛ゝゝとゝ人連
ど何はもうえるとね男四名。お糸いふりもれ不審新「ゝゝゝゝゝで
ぞいまん「ゝゝゝゝゝ

そうきょうこの方い君様の旦那で此頃中々義母さんに対し
てもあまりあり人月旦那のお出なさるなアに花ぐらいやせう。
金銭お義母さんと世話人と一緒ゝ糸る所であつぶ旦那へ今
朝ゝ網ゝお出なすつて今丁度お帰りげ。勿論義母さん
ホモ旦ゝ掛つぶ。亜蹄ゝゝ一足先へと社作ゝ家領号
が御ゝ人参りやこモウ義母さんも飯んなせませう。お積
やでおお花もお酒の支度でもそれお義母させ細の魚と土産ホ
仕度ゝて。中川ぐらとおせるすつて。大分漁がこぜんや。今ホ

ホ旦那ゝ持ゝ来アル。工旦那アノ顔ちやア。法室ゝんでこぜんや
すま。安俵も細ゝ来アノ度と出ます。成程のとまさまいこぜん
ませんゝゝトいひゝ大ぶの袖をひき。前と傾げ御ゝ受ゝ
エモシ行花も凄いわど鮮川でこぜんます。是ぢやアいまお来
るすつそれ正こぜくやすぜト藤のあらうをちよんと放げべ大ぶい
眺ホ。文字糸をぶろく視て。莞示笑つてゝゝと細ゝ。お
いこで胸ぜちゝ撥剥ゝ斗ホ焦ぶ。ぶまも深世と自色ゝ。
気ぶとりゝゝ七ゝん。ホを天性と後瓶の。その金性の大

国立国会図書館　松の花 5編 208-696
ガラス使用

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

財金。及び祥郷とぞ。打うち嵩高き母祝。孫ふ引き
孫物老媼「ヤレ〳〵且那。さぞお待ちどをでございましたらう。ちよろ
〳〵傍ばをいさてさうつまつて。湯このこ。振切て来ました。
ホヽコレお糸や。大ちさは接拶をしたらう。この且那がおおのこを
種〳〵世話切ふ云て下さる。ホンニあの位うりのごぜ。ヤとの見ち
まど若物の若摂れ人のう早く彼方の帳ふをも見せ。ホンニ
モウ若エものハ一ちう十まで世帳ゲ下げ。ホヽ且那エ取ちつうう牛の
ちを二向猿児で困りまん。見ちうを和ふよく仕ちを。お世ひ
ヤさ母やアちうません。ホヽ「ドヽ〳〵」大い合傍ガ死さう。若母ガ
気を揉うう。そう若物をお若摂ヨトいそれくお多い逃ちるど。
納戸へ入ちてちう出て帰ふ。若ガちる間ふかの文を抜いてえ
ふふそのを孫佐七ガ自筆ふあ〳〵ざまびかやうの文ふ人情〳〵。
さべきふあ〳〵と情りあゞ〳〵こんるふ先後行とも手び。今宵
かの人の来ちう〳〵ちよふいとで踏気ちるまび。世方い覚悟を究め
ちう。いち〳〵見まを云ちう。何の未ふ偽ちうふの拍ふ未をれ
ゞ若ちて角まを密と来るべ〳〵。奏しさてふたのわふ云さんとのこ

国立国会図書館　松の花 5編 208-696
ガラス使用

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

まてあり。おあい今さゝ肉あち付ぢ。仕七ホ遠ひいあるまでけれど。
表出ゆいでおあさ多ル有ようとあるのこゝあるまで。彼人あゝで彩
ホ文を紙まべき人ハあ。結ちて姉ハ彼人あゝび見ハ行れと
ゆあるゝんと心ま空ホ乳ま類例毋のお菜ハ乳を焦燥ぢゝ
来りて「そちの男ハ何と在遅ゝ来て居るのゝ。傑ホ持ぢあれ人ゝ。
且彩ぢ今日のお土産ぢて。細の恵をゝつさろと。今挑ゝぶ行て
来さゝる。夫ま見ま。お有ぢホ。その肝んの夢人ぢ居ゝくゝちゃ
掘りぢ恵い酒ま殺ま秋ホ来て今酒ま張まてゝ。サアきろゝゝと

来れ人のカト人ぢ受すい大音ホ。ハ
ホ悩ゝまべ衣の腰を考てうホ乳ゝてあげゝゝホ声ゆて。敦園祇の
怖ろしさお多い痛さと流元ゝ「ア。ア今迄ホ来り来人ト
ゝゝど心の進ゝゝ祇。塞ぢる胸と結ゝまホ溢海。眼ち拭ひ
人ぢ出ゝび振十ぢ。お来の手をゝり大きの例へ居ら世待うホ。
カの魚ゝまを並べゝて。入きゝゝ出べまゝ。ハ蛍示と笑ゝさゝり
ぢ。孫物老猫い先刺より。お来ぢ振の平生多ゝゝ成ル
まべ竹ゝ乳の毒敬ゝ延ホ在あホ祇ハと取あげ「ア」ホ来さん

一ツおあがり給へと且那ふかう上るさいかう殺ハおれ利なる亀のものが
宜ごさいまさうと「オニ」お殺い自由ゆ事。異いけお酒を飲ると
稍異くなりますうで次第仙ちてお長るさの「丈ぢゃアおお
根仏まりど「オニ」ニ口や三口い活ます人おるゆ豊元気を助なつへ
ドレく長物がお酒を仕やう「アレ」酒をまたト食くなるく彼方ハこ
方と巡る盃内移す。ちゆ幾次を打ちくまたくしるまゆ酒も
かも。ふ云ふの酔を発して次第ふ変も自園や。葡萄ふあ
ら祝ども。祭礼の福の中発てあ人丁紅きその人のくの祖ふ

塞ぎて更ふ沒ふ云ふいあけをとまあ入ッふハ行ゆ身柏ふ未
おゆ抜出て動静を見見居いあと。此方ハ見張とるうハ。
俱ふ冥去ふふるう。但しさを延のう丈さ人見さあ彩
さなとふひ出らいりのあく。毋のおあ柔い例と遠ひ酒さ人陽
つく跡先ふ。ふを附て居ます。かくて八後刻の便悪しく。如
此ふ味線かい取て今様ぶの仇文句を。弾出ハゆ天
そもふ。ふ一ふを毋祝も。御ふのおちあて。砂口押へつ陽
酒ふ果ハ礼酒とあるうしも。夏の夜いと寝ふて。盗ふ実

国立国会図書館　松の花 5編 208-696
ガラス使用

208
15
696

ゆるぶ拍子木い実ふ成列と耳引と咲とも知らぬ酩酊
ども。孔子変れ大津絵ぶーチョチョンが相功の孤拳怒ぶふ
ぎと文字糸い一刷へ徒ゆり密を事と見を早めて横町の
角まで中けど孤ゆ番ど。まぎ早ゆしと汗流ふ潮うて
初静を家ゲ人所ふ。孤ゆ。ぶ。ぶ。ぶ

208
15
696

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用